

ペドロ・デ・コルドバ『キリスト教の教え』(1544年)における先住民観* —「本性的平等性」の解釈を手がかりに—

青野和彦**

Abstract

This thesis aims to clarify the view of Pedro de Córdoba, a Spanish Dominican, on the human nature of the indigenous people of the Antilles in his catechism, titled *Doctrina cristiana*. Interpreting this text, I will especially focus on the concept of 'equality of human nature' to which Córdoba referred when he proved that the indigenous people were rational creatures in order to fight against racial prejudice which was caused by the Spanish ruling system called 'encomienda'. As Gustavo Gutiérrez, a Dominican theologian, pointed out, Córdoba mentioned this concept in the text, relating it to 'loving your neighbors', a supreme commandment of Christ. In this context, Córdoba understood 'equality of human nature' to mean the infinite goodness of God who intends to save the humans from their sins. Moreover, Córdoba understood 'loving your neighbors' as love that leads humans to recognizing the 'nature of God', which means 'final happiness'. Having interpreted the concept of 'equality of human nature' and that Christ's commandment, I find a common parallel between them where God's love leads humans to that happiness. Finally, I conclude that Córdoba regarded the indigenous people as rational creatures that God's salvific will especially covers.

1. はじめに

1.1 研究目的

本稿は、スペイン人ドミニコ会士ペドロ・デ・コルドバ (Pedro de Córdoba 1482-1521) の思想を扱う。彼は 1510 年から 1521 年まで大アンティール諸島のエスパニョーラ島サント・ドミンゴ市¹⁾においてドミニコ会副管区長 (vice-provincial) を務めた。そして彼は、私が研究してきたバルトロメー・デ・ラス・カサス (Bartolomé de Las Casas 1484-1566) の思想と活動に影響を与えたと言われる²⁾。今回はその影響に関する研究の前提として、ドミニコ会によるインディアス³⁾初の公教要理であり、コルドバが執筆に携わった 1544 年版の『キリスト教の教え』(*Doctrina cristiana para instrucción y información de los indios por manera de historia*)に見られる彼の先住民観を個別に取り上げて考察する。特にここでは、コルドバが先住民⁴⁾の人間性を証明した思想的根拠に着目したい。なぜなら、それはエスパニョーラ島を中心とする地域における彼のキリスト教布教と先住民擁護活動の原点であり、彼の先住民観を解明する上での鍵となると考えられるからである。

1.2 『キリスト教の教え』の緒論

ここではまず、コルドバのエスパニョーラ島派遣の経緯と本書の成立事情にふれる⁵⁾。

*Pedro de Córdoba's View on the Nature of Indigenous People in his Catechism *Doctrina cristiana* (1544) :With a Focus on Interpreting 'Equality of Human Nature'

**Kazuhiko Aono

コルドバはスペインのサラマンカにあるサン・エステバン修道院でドミニコ会司祭に叙階された後、1509年にインディアス派遣の命令をドミニコ会総会長トマス・デ・ビオ・カイェタノ (Tomás de Vío Cajetano 1469-1534 [総会長在職 1508-1518]) より受けた。翌 1510 年、コルドバはアントニオ・モンテシーノス (Antonio Montesinos ?-1545) はじめ 3 名のドミニコ会修道士達と共に、同修道会初の布教団としてサント・ドミンゴに渡航した⁶⁾。コルドバは同地に到着直後、「エンコミエンダ」(encomienda)⁷⁾の受給者達 (encomenderos) が先住民を虐待し、彼らへのキリスト教教育の義務を履行していない実情に直面した。コルドバはそれを改善するため他のドミニコ会士達と共に、先住民の擁護活動と日曜日と祝祭日毎の説教を通して先住民の信仰教育を強化する方針を定めた。それに沿って、コルドバ達は 1510 年から 1521 年まで説教を行い、それを彼らの用途のために『アンティール公教要理』(Doctrina antillana) として集約していった。それは未刊であったが、コルドバの死後、その価値を認めたドミニコ会士ドミンゴ・デ・ベタンソス (Domingo de Betanzos ?-1549) が、その原稿をヌエバ・エスパニーヤ⁸⁾に持参し、同僚修道士達と共にそれに加筆⁹⁾したと言われる。その結果、カステイリャ語版『キリスト教の教え』が 1544 年にメキシコ市で出版された¹⁰⁾。

次に、本書の著者と執筆目的、典拠と文体的特徴、構成を簡述する。

著者について定説はない。但し、本書表紙で著者がコルドバと数名の博学なドミニコ会士達であると明記される理由から、ミゲル・アンヘル・メディナはコルドバの執筆への関与を認め、彼を主要著者とする仮説を立てる¹¹⁾。また、クレスポ・ポンセも同様の立場をとる¹²⁾。

本書は、メキシコでの宣教師と教理教師用の先住民への信仰教育の手引書として執筆された。なお、本書の土台『アンティール公教要理』の執筆目的は前述のとおりである。

典拠について、本書はアウグスティヌス (Aurelius Augustinus 354-430) の『信仰・希望・愛』(De fide, spe, caritate) に着想の起原を持ち、トマス・アクィナス (Thomas Aquinas c. 1225-1274) の『神学大全』(Summa Theologiae) からも思想的影響を受ける。また形式的には 15～16 世紀のスペインの公教要理、特にフランシスコ・ヒメネス・デ・シスネロス (Francisco Ximénez de Cisneros 1436-1517) のカテキズム (1498 年)¹³⁾に倣う。また本書の文体的特徴は問答形式を採用せず、先住民のキリスト教信仰への関心を喚起させつつ、平易な聖書物語体で記述する点にある¹⁴⁾。

本書の構成は次のとおり。1) 序言、2) 信仰箇条、3) 十戒、4) 秘跡、5) 慈善事業、6) 十字架の切り方と 3 つの十字の意味、7) 十字による祝福の方法と意味、8) 受洗後の説教、9) 天地創造から終末までの簡潔な世界の歴史、10) 食前の祝福、11) 食後の感謝、12) 奥付。

1.3 問題の所在

続いて、本主題に関連する先行研究に注目する。それらは西語圏に集中して見られ、要約すれば、インディアスでのドミニコ会士達の活動理念や『キリスト教の教え』の思想的特色を分析する際、エンコミエンダによるスペイン統治下で、先住民の人間性を擁護したコルドバの視点にふれる内容となる。例えば、ラモン・エルナンデスは、先住民を人間的本性に欠けた存在、または才能の欠けた自然奴隷と見なしたエンコメンデロ達と側近者達に対し、コルドバが先住民に生来具わる平等性を根拠に彼らの人間性を擁護したと述べる¹⁵⁾。また、先の緒論で挙げたポンセも、先住民は布教を必要とする人間であるというコルドバ達の確信が、本書の基調に見られる点に言及する¹⁶⁾。この先住民の平等性・人間性の根拠をより具体的に示したのが、

ホセ・デ・マルティン・リベラと緒論でふれたメディナである。つまり、彼らは「すべての人間がその先祖アダムとエバから発出する」という本書の記述から、コルドバが先住民の「本性的平等性」(la igualdad de naturaleza)をその根拠として証明した点を指摘するのである¹⁷⁾。さらに、ペルーの神学者グスタボ・グティエレスはこの点を展開する。彼は先住民が搾取や死に苦しむ原因をスペイン人植民者達による先住民蔑視に求め、コルドバがその状況下で本書を著わす際、「己を愛するごとく、隣人を愛せよ」という「福音の掟」を深く論じたものと考え¹⁸⁾。そして、コルドバが本書の中で先住民の平等性を唱えた理由を、人間がすべてアダムとエバの血をひく子孫であることを望む神の意志に見出したものと捉える¹⁹⁾。つまり、コルドバは先の「福音の掟」が先住民にも適用されるべき根拠を創世記第2章に置いたというのが、グティエレスの見解の要点である。そこには、先住民の「本性的平等性」と「福音の掟」に示される「隣人愛」との密接な思想的関係が窺える。

しかし、これらの研究は前述の範囲にとどまるものであり、コルドバの先住民観を考察する上で、次の重要な問題の検討がなされていない。つまりそれは、彼が『キリスト教の教え』の中で、エンコミエンダの下で抑圧された先住民の「本性的平等性」を「隣人愛」との思想的関係においてどのように捉えたのか、という問いである。

そこで、この解明を踏まえつつ本稿の主題を考察するために次の方法を用いる。つまり第1に、『キリスト教の教え』における「本性的平等性」の思想的内容を言及箇所解釈により探つてゆく。その際、言及箇所への丹念な解釈を試みるポンセの研究も参考にしたい。第2に、「隣人愛」の思想的内容を同じ手法によって探る。第3に、「隣人愛」との思想的関係、さらにもうひとつの一次資料であるコルドバの数通の書簡に見られる先住民理解から「本性的平等性」の内容を検討する。最後にその検討に基づき、彼の先住民観を明らかにしたい。なお、本書の底本として、メディナによる現代西語版とそこに所収の写本複写を用いる²⁰⁾。

2. 「本性的平等性」の解釈

2.1 「本性的平等性」に関するテキスト

まず、テキストにおける「本性的平等性」の要点を探る。『キリスト教の教え』の中でそれは「信仰箇条」に示される。同箇条は「使徒信条」(credo)に基づき神とイエス・キリストに関する知識を先住民に授け、信仰を求める内容となる。以下にその構成を記す。

・神の性質に関する信仰箇条 (fol. 2r-12v)。

第1箇条：神の性質、その唯一性と全能性。第2：1つの本性と3つの位格を持つ神、父なる神。第3：父なる神であるキリスト。第4：父なる神である聖霊。第5：創造主である神。第6：人間の罪を赦す神。第7：死者を復活させる神、終末と最後の審判。

・キリストの人性に関する信仰箇条 (fol. 12v-18r)。

第1箇条：神の子の受肉。第2：マリアの永遠の処女性。第3：キリストの受難と死。第4：キリストの地獄降下。第5：キリストの復活。第6：キリストの昇天。第7：キリストの再臨。

「本性的平等性」は「神の性質に関する信仰箇条」の第5箇条で言及される。それは先住民に神が万物の創造主であることを教える内容になる。以下に該当箇所を抜粋する。

これら2人の人間アダムとエバから世界中の人々が生まれてきた。そしてあなたたちもわたしたちもすべて1人の父と1人の母、アダムとエバから生まれてきた。

男と女であるこれら 2 つの被造物を、神は身体と魂で造られた。こういうわけで、全世界のすべての男と女が存在する。そしてすべての男と女は神が最初に造られたこれら 2 人から生まれていった²¹⁾。

ここでコルドバは主に『創世記』第 2 章に依拠し、アダムとエバから全人類が生まれたことを述べる。つまり、彼は人間の「本性的平等性」の原因を神による人類の始祖アダムとエバの創造に見出しており、そこに「本性的平等性」の要点が認められる²²⁾。

2.2 テキストの解釈

では、コルドバは「本性的平等性」が起因する神による人間の創造を本書でどのように捉えるのか。その考察を通して「本性的平等性」の内容をさらに明らかにしたい。先の抜粋文は、神が被造物の 1 つとして人間を創造した理由と方法を説明する文脈 (fol. 5v-6v) に位置するため、そこに注目して解釈する必要がある。

まず神が人間を創造した理由について、コルドバは神への不従順さのために天国から追放され悪魔に変化した天使達の天国での家と座を与え、満たすためであると述べる²³⁾。そこにはアウグスティヌスの『信仰・希望・愛』の第 2 部第 2 章の影響が窺える。彼はその箇所で神がアダムの墮罪以後も前述の理由のために彼の子孫を創造することを説明する²⁴⁾。つまり、アウグスティヌスは理性的被造物である人間がアダムの罪と罰により滅んだが、その一部は救われて放逐された天使達の滅った分を補充することになったと語るのである。そして、アウグスティヌスはその根拠として、神の天使達に等しいものになることが復活の時に聖徒達に約束されるというルカ 20:36 の言葉を挙げる²⁵⁾。そこにおけるアウグスティヌスの思想的特色は、人間の創造を神による救済との関係で論じている点にあらう。それはアウグスティヌスが同箇所において、神がアダムとエバの墮罪に起因する原罪を引きずる人間の回復を欲し、それをただ憐れみによって救済する意志を持つと述べる点²⁶⁾に認められる。なお、人間の救済について、コルドバは『キリスト教の教え』・「キリストの人性に関する信仰箇条」の第 3 箇条で言及する。つまりコルドバはその箇所で、神の子キリストの十字架での受難の理由が全人類の贖いにあり、またその受肉の目的が彼らを悪魔の力による死から贖い、解放することにあつたと説明するのである²⁷⁾。なお、ポンセはこの思想的背景として、トマスの『神学大全』第 3 部第 4 問題第 4 項第 1 異論解答の影響を挙げる²⁸⁾。同箇所ではトマスは、キリストが普遍的な救世主であり、すべての人間にとって救済の普遍的原因であることを論じる。それを参考にすると、コルドバは原罪の赦しの根拠をキリストの十字架の贖罪に見出したものと言える。この内容から、コルドバは神による人間の創造の目的を墮天使に代わる単なる補充ではなく、神の憐れみから発出する人間の回復、つまりキリストの贖罪を根拠とする救霊として捉えたことが判明しよう。

次に神が人間を創造した方法について、コルドバは創世記 2:18-23 に基づき、神がアダムを土から、そしてエバを彼の肋骨から創造したと述べる²⁹⁾。その箇所では、神が彼らを被造物の中で最も美しく完全な存在として創造したという記述に注目したい。それに関連する記述は『キリスト教の教え』・「神の性質に関する信仰箇条」の第 1 箇条にも見られ、コルドバはその部分で唯一、全能、善なる神がすべての美しい被造物を生むと述べる³⁰⁾。つまり、コルドバは土や肋骨という一物質から最高の被造物である人間を創造する神の善性の偉大さを強調するのである。因みに、アウグスティヌスは『信仰・希望・愛』第 1 部第 1 章において、すべての

被造物の原因が唯一の真の神・創造主の善性のみであると述べる³¹⁾。そして彼はその第2章で神の善性を最高かつ不変的なものと捉える³²⁾。それゆえ、神の善性に関する前述のコルドバの理解にもアウグスティヌスの思想的影響が認められる。

人間の創造の方法に関するコルドバの記述でもう1つ注目すべき点は、神がアダムとエバを身体と魂から成る存在として創造したことである。先の引用文の直後でコルドバは双方の性質にふれる。つまり、人間の身体はその両親により生み出され、朽ちる存在である一方、その魂は神により創造され、知性を持ち、不死であると述べるのである³³⁾。この魂の性質に関して、ポンセは『神学大全』の人間論の影響を指摘する³⁴⁾。具体的にそれは、同書第1部第75問題第2項に見出されよう。つまり、トマスはその箇所で人間の魂を知性的な働きの根源、ある種の非物体的にして自存する根源であり、すべての物体の本性を認識しうるものと考えてるのである³⁵⁾。またトマスは同問題第6項ですべての知性的実体は不滅であり、知性的根源である人間の魂も不可滅的であると述べる。さらに彼は同項第1異論解答で他の諸動物の魂とは異なり、人間の魂は神によって創造されたゆえに死滅しないと答える³⁶⁾。ポンセはその理由として、『キリスト教の教え』の中に人間の魂が不死である神の似姿であり、その魂を神が保持するという思想の所在を挙げる³⁷⁾。このように、コルドバは人間の構成要素とその魂の不死性を示す。そこには、彼が全人類を共通の属性を持つ被造物として捉える点が、顕著に認められる。

この解釈から、コルドバの次の創造理解が明らかになろう。つまりそれは、神がその善性からアダムとエバの子孫を身体と魂を持つ存在として創造し続けているという理解である。そして、その目的は神がアダムとエバの墮罪によって受け継いだ人間の罪をキリストの贖罪の効力により赦し、救霊することにある。この理解において、神がすべての人間を同等に創造した理由から、先住民も神の愛と救霊の対象と見なすところにコルドバの主張が認められよう。またそれは、彼が『キリスト教の教え』「序文」で先住民に対する神の好意を知らせ、天国での幸福と喜びを彼らに享受させたいと叙述する点³⁸⁾からも読み取られる。因みにメデイナは、「神は愛する人間の友である」という神の先行する愛の思想が本書を貫流する点を指摘する³⁹⁾のであるが、それは先のコルドバの主張にも反映されている。

この創造理解から、コルドバは「本性的平等性」を次のように捉えたものと考えられよう。つまり、それは身体と知性を持つ魂から成るすべての人間に共通する属性であり、人間の救霊のために完全性と美を含む神の善性から分有された性質である。

3. 「隣人愛」の解釈

3.1 「隣人愛」に関するテキスト

ここではまず、テキスト上の「隣人愛」の要点を探る。コルドバは『キリスト教の教え』においてそれを「十戒」(fol. 18r-20r)の中で言及する。以下にその構成を挙げる。

- ・戒めの目的。
- ・戒めの説明。第1戒：唯一の真の神への崇拜と愛。第2戒：神の名を用いて空しく誓うことの禁止。第3戒：祝祭日の遵守。第4戒：父母への敬意。第5戒：殺人の禁止。第6戒：姦淫の禁止。第7戒：盗みの禁止。第8戒：偽証の禁止。第9戒：隣人の妻を欲することの禁止。第10戒：他人の財産を欲することの禁止。
- ・「十戒」の要約と禁止される行為の列挙。

コルドバは「隣人愛」を「十戒」の要約部分でふれる。以下にそれを抜粋する。

これら 10 の戒めは、2 つに要約される。第 1 はあらゆる事柄にまさって神を愛することである。第 2 はあなたたちの隣人を自分自身のように愛することである⁴⁰⁾。

コルドバはこの引用文をマタイ 22 : 37-40 に基づいて記述する。そこでは、「隣人愛」は出エジプト記 20 : 1-17 の十戒を集約し、「神への愛」に並ぶ最も重要な戒めとして位置づけられる点が要点になろう。

3.2 テキストの解釈

では、コルドバは「隣人愛」を「神への愛」との関係でどのように捉えたのか。その考察を通して彼の「隣人愛」理解を明らかにしたい。

コルドバは本書でこの問いに直接ふれていない⁴¹⁾。そこで考察の手がかりとして、まず本書の文脈に注目する。コルドバはその「序文」で先住民を神の友として天国に栄光に招くという神の救済の招き、つまり本書全体の指針を示す⁴²⁾。そして、彼は本書の中で「十戒」をこの神からの招きに与るための条件として位置づけ、それを「十戒」の前文で明記する⁴³⁾。この文脈を勘案すると、コルドバは「隣人愛」を「神への愛」と共に、神が招く先住民の救済のために遵守すべき掟と捉えたことが明らかになる。そして、その理解には人間の救済に対する双方の愛の不可分的関係が窺える。

次に、前述の引用文が依拠するマタイ 22 : 37-40 における双方の愛の関係に注目する。それに関して『信仰・希望・愛』および『神学大全』を参考にしたい。アウグスティヌスは前掲書で I テモテ 1 : 5 を根拠にすべての戒めの目的は愛であり、その愛は「神への愛」と「隣人への愛」であると述べる⁴⁴⁾。因みに、アウグスティヌスは『キリスト教の教え』(*De doctrina christiana*) で双方の愛の関係に関し、神への愛が先立ち、十戒には明らかに神をいかに愛すべきかが命じられおり、それ以外の愛は神への愛に合流すると論じる⁴⁵⁾。そして彼は神を愛する者の目的を神の与える「永遠の報酬」として示す⁴⁶⁾。つまり、アウグスティヌスは「隣人愛」を、先行する「神への愛」に合流する愛として関係づけるのである。

一方、トマスは『神学大全』において、「隣人愛」を「神への愛」と共に十戒を秩序づける規定として捉える⁴⁷⁾。そして、彼は「隣人愛」を愛徳 (*caritas*) によって愛され、「神への愛」と共に人間を神の善性、永遠の至福の分ち合いに導く愛として位置づける⁴⁸⁾。なお、トマスの言う「至福」(*beatitudo*) とは、究極の完全な幸福であり、人間の知性によって神の本質 (*divina essentia*) を認識することを意味する⁴⁹⁾。また、トマスの考える愛徳とは、神が自らの至福を人間に分ち与えることを根拠に双方の間の何らかの分ち合いの基礎の上に成立する、神に対する人間の一種の友愛 (*amicitia*) である⁵⁰⁾。それは人間に注入される聖霊を原因とし⁵¹⁾、前述の至福の分ち合いを目的とする愛でもある⁵²⁾。トマスはこの愛徳によって、人間が愛すべき対象をまず至福の原因である神と考え、次に神から至福を分有する隣人とする⁵³⁾。さらにトマスは「隣人愛」を、神を愛するという目的の手だてという仕方で、隣人への愛へ人々を導く掟と捉える⁵⁴⁾。

この論考から明らかのように、トマスは「隣人愛」を「神への愛」と共に至福への到達という目的のもとに位置づけた。その点で双方は、トマスが論考するように同一の種にある⁵⁵⁾ 愛と言えよう。さらに、彼は隣人愛を、愛徳によって「神への愛」が至福に向かう際的手段とし

でも捉えた。そしてそこにも、アウグスティヌスと同様に、「神への愛」への「隣人愛」の合流という考えがみられよう。

以上の解釈から、コルドバは「隣人愛」を、友愛によって「神への愛」が至福、つまり神の本質の認識に向かう上で、「神への愛」に秩序づけられる愛として理解した点が導かれる。それゆえ、コルドバはその「秩序づけ」の中に至福に向かう「神への愛」に対する「隣人愛」の不可分的関係を認めたものと考えられる。また、コルドバは『キリスト教の教え』の中で「隣人愛」の掟を神の友になるための条件と捉えた。本書の中でそれが成立する前提は、先住民に対する神の先行する救霊の招き、つまり神の愛にある。そこから、コルドバが「隣人愛」を前述の秩序の中で、その神の愛に応答する愛として理解した点も明らかになる。

4. 「本性的平等性」の検討

4.1 「隣人愛」との思想的関係からの検討

では、コルドバは「本性的平等性」を「隣人愛」との思想的関係においてどのように理解するのか。まず、その考察から「本性的平等性」の内容を検討したい。

これまで解釈から、「本性的平等性」と「隣人愛」には共通して人間に向けられる神の愛を第一原因として人間を神の本質の認識、つまり至福に導く性質が見出される。したがって、その点に双方の思想的関連性が認められる。先にふれたように、この至福への導きの過程を成立させる根拠がキリストの贖罪である。その意味で、贖罪は神の愛が具現化した恩恵のしるしであると言えよう。また人間を至福へ導く際、「本性的平等性」と「隣人愛」は分離することなく、後者は前者によって知覚され、働く愛であると考えられる。なぜなら、「本性的平等性」に具わる知性的根源である魂によって人間は神の愛を知り、そこから神と隣人への愛を実践することが可能になるからである。つまり、「本性的平等性」は救霊のために神から付与された人間の共通の属性であり、その魂の働きによって人間に「隣人愛」を知覚させる性質であると言える。

4.2 書簡の先住民理解からの検討

次に、エンコミエンダによるスペインの統治下に置かれた先住民の性質に関するコルドバの理解を彼の書簡を参考に探り、そこから前述の「本性的平等性」の内容を検討したい。

まず、コルドバの書簡の執筆事情にふれておく。現存する6通の書簡⁵⁶⁾は1517年頃にサント・ドミンゴで執筆された。コルドバが1510年にエスパニョーラ島に到着した時点で、同島のアラワク(タイノ)族はエンコメンデロ達が課した鉱山や農場での苛酷な労働のため死滅に瀕していた⁵⁷⁾。その後、スペイン王国の遠征軍はキューバ島、小アンティール諸島からティエラ・フィルメと呼ばれた現ベネスエラ沿岸部まで征服範囲を拡大した。特に同遠征隊はエスパニョーラ島の労働力を補充するため、征服地住民を奴隷として同島に移送した⁵⁸⁾。この事態を憂慮したコルドバとドミニコ会布教団は、1516年以降、この無差別な奴隷貿易を非難・告発してゆく。なぜなら、彼らはそのような搾取体制が温存される中で、先住民に福音を説くことは無理であると判断したからである。この状況下、コルドバ達はエンコミエンダの違法性をスペイン国王カルロスI世(Carlos I 1500-1558 [在位 1516-1549])をはじめ、彼の摂政達や重臣達に訴え、エンコメンデロ達による虐待から先住民を擁護する目的で書簡を執筆した。

次に、書簡に見られるコルドバの先住民理解に注目する。『フランシスコ会士達とドミニコ会士達のスペイン摂政宛ラテン語書簡』(*Carta latina de dominicos y franciscanos de las*

Indias a los regentes de España) でコルドバ達は、エンコミエンダ下のエスパニョーラ島でスペイン人統治者達が出エジプト記に登場するファラオ以上に先住民を「獣より劣等な」存在として鉱山労働で搾取する実態を詳細に報告する⁵⁹⁾。またその状況下で、彼らは先住民の魂をキリストが贖罪し、悪魔の力から解放するために聖職者達に委ねられたものと捉え、先住民の性質を「教理を受けるのに適した」⁶⁰⁾ ものと述べる。

また『聖ドミニコ修道会副管区長ペドロ・デ・コルドバ修道士の国王宛書簡』(*Carta al rey, del padre fray Pedro de Córdoba, vice-provincial de la orden de Santo Domingo*)⁶¹⁾の中で、コルドバはキリスト教徒達が先住民を獣以下に虐待し、征服した島々を破壊している状況をカルロス I 世に報告する。その中でコルドバは先住民の性質が非常に柔和、従順かつ善良であると述べ、宣教師達だけが平和的に彼らに接触し、介入することを提言する⁶²⁾。

これらの内容からコルドバは、先住民のキリスト教化という元来の機能を果たしえず、征服者達の物質的欲望を充足するための奴隷制に変容したエンコミエンダを問題視したことが窺われる。また、彼が同制度の支配下にある先住民を、柔和な性質とキリスト教を受容可能な理性と能力を具える存在として理解した点も判明する。そこにはコルドバの活動期のインディアスにおいて先住民が「獣」あるいは「自然奴隷」⁶³⁾と見なされ、その理性的本性が疑問視された背景がある。その見解を支持した代表的なスペイン人として、王室官吏にして歴史家のゴンサロ・フェルナンデス・デ・オビエード・イ・バルデス (Gonzalo Fernández de Oviedo y Valdés 1478-1557)⁶⁴⁾、またダリエン司教ファン・デ・ケベード (Juan de Quevedo c. 1450-1519)⁶⁵⁾が挙げられる。しかし増田が指摘するように、より一般的な背景には西洋の国家主権者や民衆の間にキリスト者の社会のみが真の人間社会であり、万民法はキリスト教国家 (Respublica Christiana) のみで通用するという中世以来の観念があった⁶⁶⁾。それがインディアスに適用されれば、先住民への武力征服や奴隷化が容認される結果となる。しかし、コルドバはエスパニョーラ島での初期の布教経験からその観念の欺瞞性を見抜いていた。その証拠に、彼は同島コンセプション・デ・ラ・ベガ市での 1510 年の説教体験から、先住民のキリスト教に対する知解力と、キリスト教教育を願望する彼らの傾向を発見していた⁶⁷⁾。

また、コルドバが先住民の魂を悪魔の力から解放するためにキリストの受難によって贖われた尊い存在と捉えた点にも、彼の理解の特色が認められる。前述のとおり、コルドバはそれを『キリスト教の教え』のキリストの人性に関する「信仰箇条」で言及している。

さらにコルドバは、キリストの受難にあずかる生活を修道生活と司牧の目標とした点にも注目したい。コルドバは『ミセール・デ・セヴレス宛の書簡』(*Carta que escribieron varios padres de las ordenes de Santo Domingo y San Francisco, residentes de la isla Española, a Mr. de Xevres*)の中で、十字架につけられたイエス・キリストを探し当て、その受難にあずかることを最高の希望にして、エスパニョーラ島に渡航したと述べる⁶⁸⁾。これまでの考察を勘案すれば、キリストの希求とその受難の共有とは、キリストが贖罪した先住民の只中に、エンコミエンダによって搾取されるキリストを発見する生活であったと言えよう。そしてこの生活に徹することで、コルドバ達はスペイン人統治者達による蔑視と抑圧から先住民の生命と尊厳を擁護する活動へ促されたのである。因みに、モンテシーノス修道士は上長コルドバの指示によってサント・ドミンゴで行なった 1511 年の説教で、先住民を人間と見なし、隣人として愛すべき義務をスペイン人統治者達に訴えた⁶⁹⁾。またポンセによると、コルドバ達は全人類の救霊を目的とする神の受肉の出来事に布教活動の基盤を置いた⁷⁰⁾。この事例と研究からも、

コルドバは前述の生活を先住民擁護の原動力にした点が明らかになる。

これらの書簡に見られるコルドバの理解は、キリスト教受容への能力を具えるゆえ先住民は獣ではなく、キリストの贖罪の対象となる人間であるという点に収斂される。そこには、その贖罪を通して先住民が神からの愛に招かれ、キリスト教への受容能力、すなわち「隣人愛」の実践に必要な認識能力を有する存在であるという理解が認められる。それゆえ、この理解は前述の「本性的平等性」の内容と符合するものと言える。

この検討から、コルドバの理解する「本性的平等性」は、スペイン人同様に先住民を至福に導くために神が付与した性質であると考えられる。思想的にはその導きの過程の中に、神の恩恵による人間の自然本性の完成というトマスの主要命題⁷¹⁾が看取されよう。しかしその性質自体に着目すれば、コルドバの理解の核心にはこの命題以上に、アウグスティヌスとトマスの神学理論に依拠する前述の創造理解が見出される。

一方フランシスコ会士達は、コルドバの活動期のアンティール諸島において学校の建設等を通して先住民の改宗化に努めた⁷²⁾。また前掲の手紙から窺えるように、特に1516年以後、彼らもドミニコ会士達と同様、エンコミエンダへの労働力供給を目的とする奴隷貿易の弊害が顕在化するにつれて先住民保護の立場を鮮明にしていった。しかし、それ以前にフランシスコ会士達は先にふれたモンテシーノスの説教を巡ってエンコミエンダを支持するスペイン人統治者側に回り、ドミニコ会士達と対立していた⁷³⁾。この出来事から、コルドバは前述の「本性的平等性」理解に基づき、いち早く同制度から先住民を擁護した点が判明しよう。

5. 結び

以上の「本性的平等性」の検討から、コルドバの先住民観を導きたい。それは、キリストの贖罪に顕わされる神の救霊意志が向けられた理性的被造物として先住民を捉えるものであると言えよう。つまり、コルドバによると、先住民もこの神の意志のもとでスペイン人と同様に人類の始祖アダムとエバの子孫として魂と体から創造された人間なのである。換言すれば、修道士コルドバにはエンコミエンダの下で先住民を駄獣扱いし搾取するスペイン人統治者達の行為は、先住民を含む全人類に注がれた神の愛に対する忌むべき背信に思われたのである。またこれまでの考察から、コルドバはその先住民理解を布教地における自らの活動と修道生活の中で醸成すると共に、ドミニコ会が重視した前述の神学理論に基づいて形成したことも明らかになる。さらに『キリスト教の教え』、より厳密には『アンティール公教要理』に見られる彼の思想的功績について言及すれば、それは先の先住民観に立脚してエンコミエンダの下で抑圧された先住民の人間性を先駆的に証明し、彼らの救霊の意義を明確化した点に見出される。

最後に、コルドバの先住民観の歴史的影響にふれたい。彼は前述の観点に依拠してエンコミエンダと先住民を狙ったスペインの奴隷貿易に異議を唱えた。その活動の底流には、キリストの受難にあずかるという修道生活の目標と共に、先住民を隣人として愛することを統治者達の救霊の条件とするコルドバの主張も窺える。なぜなら、既に見たように、彼は『キリスト教の教え』の中で「隣人愛」をすべての人間が救霊されるための要件として捉えたからである。一方、リベラが指摘するように、コルドバは本書を通して先住民に人間としての自覚を形成させることも意図した⁷⁴⁾。メディナによると、その自覚とは先住民が神に創造され、神の友になるように定められた人間であるという意識の覚醒であった⁷⁵⁾。けれども、コルドバの死後もスペイン軍の征服戦争は継続され、特にベネズエラ沿岸部での奴隷狩りは1522年に先住民の反乱

を招く程に強化されていった。また、エンコミエンダも 1542 年にカルロス I 世が發布した「インディアス新法」(Las Leyes Nuevas) により暫時撤廃されることになったが、植民者達の根強い抵抗運動の末、存続された。この経過を鑑みれば、コルドバの意図は頓挫したかに見える。しかし、彼が活動の支柱とした先住民観は他のドミニコ会士達にも継承された点で、その影響力は決して微弱ではなかったと言える。特にコルドバの思想は、1515 年以降親交を持った司祭ラス・カサスの長期かつ、スペイン国内とインディアスの広範囲にわたる先住民擁護活動に影響を与えたと思われる。そして、その精査がわれわれの今後の研究課題となる。

(本稿は、2010 年 9 月 10 日～11 日に宮城学院で開催された「キリスト教史学会」第 61 回大会において同名の論題で発表した内容に加筆・修正したものである。)

注記および引用文献

- 1) 同市は 1496 年に建設され、以後スペインによる大小アンティール諸島および中南米大陸への布教、征服と探検の拠点となった。また、1511 年にセビリア大司教の管轄下に司教座が同市に設置された。なお、エスピノーラ島は現イスピノーラ島 (ハイチ、ドミニカ共和国) を指す。
- 2) 『布教論』(*De unico vocationis modo omnium gentium ad veram religionem*) におけるラス・カサスの布教理念の研究を指す。なお、彼への影響については次の文献を参照。Bartolomé de las Casas, *The Only Way*, ed. by Helen Rand Parish, tr. by Francis Patrick Sullivan, S.J., Sources of American Spirituality, New York : Paulist Press, 1992, p. 35.
- 3) 本稿では、西インド諸島および中南米におけるスペインの征服地を指す。
- 4) 当時、大アンティール諸島には主にアラワク族が、小アンティール諸島にはカリブ族が居住していた。
- 5) それに関して次の文献を参考にした。Miguel Angel Medina, O.P., *Doctrina cristiana para instrucción de los indios*, redactada por Fr. Pedro de Córdoba, O. P. y otros religiosos doctos de la misma orden, impresa en México, 1544 y 1548, en *Historiadores dominicos 2*, bajo el patrocinio de la junta episcopal para el quinto centenario, Salamanca : Editorial San Esteban, 1987, pp. 13-23; 49-77.
- 6) 因みに、エスピノーラ島に最初に渡航したのはフランシスコ会であった。同修道会は 1500 年と 1502 年に修道士を派遣し、1505 年にサンタ・クルス・デ・ラス・インディアス管区を設立した。その後ドミニコ会に続き、メルセス会が 1526 年に同島に到着した。
- 7) 1503 年にイサベル 1 世 (Isabel I 1451-1504 [在位 1474-1504]) によって導入され、元来、征服地の先住民をカトリックに改宗させる目的でその受給者に一定数の先住民を割り当て、賦役・公租させる制度。
- 8) 現メキシコを中心とする地域。
- 9) メディナによると、バタンソス達に加筆した内容は主に偶像礼拝、人身犠牲等のメキシコ特有の宗教儀礼を矯正させるものであった。Medina, *op. cit.*, pp. 106-107. なお、『アンティール公教要理』は現存しない。
- 10) それはメキシコ大司教ファン・デ・スマラガ (Juan de Zumárraga 1468-1548) の経済的支援による。なお、1548 年に 40 の説教からなる改訂版が出版され、さらに 1550 年にも 2 回メキシコ市で再版された。
- 11) *Ibid.*, p. 57; 74.
- 12) María Graciela Crespo Ponce, *Estudio histórico-teológico de la Doctrina Cristiana para instrucción e información de los indios por manera de historia, de fray Pedro de Córdoba, O. P. (1521)*, con un prólogo de Josep Ignasi Saranyana, Colección Teológica, Pamplona : Universidad de Navarra, S. A., 1988, p. 29. なお、本稿でもこれら研究者の見解に従い、コルドバを主要著者とする立場をとる。但し、

本研究の目的が彼の先住民観を考察することにある理由から、ここでは本書の著者を「コルドバ」と表記する。

- 13) 15世紀のスペインでは高位聖職者達の主導により、イスラム教やユダヤ教改宗者達や国民のキリスト教教育を向上させるため多くのカテキズムが編纂された。シスネロスのそれもこの系譜に属し、「教区司祭の司牧、礼拝儀式、国民へのキリスト教教育を復活させ、向上させる意図」を持っていた。Ponce, *op. cit.*, p. 13.
- 14) それはコルドバがエスパニョーラ島の布教経験から獲得した方法であった。Medina, *op. cit.*, p. 24. またメディナは本書の持つ先住民の興味・欲求を喚起させる方法の中にアウグスティヌスの『教えの手ほどき』（*De Catechizandis Rudibus*）の影響を見出している。Ibid., p. 60.
- 15) Ramón Hernández. O. P., *Primeros dominicos del convento de San Esteban en América*, Ciencia Tomista, t. 113, Salamanca : Editorial de San Esteban, 1986, p. 336.
- 16) Ponce, *op. cit.*, pp. 118-119.
- 17) José de Martín Rivera, *La Doctrina Cristiana de Fray Pedro de Córdoba, en Libro Anual 1974 segunda parte*, México : Instituto Superior de Estudios Eclesiasticos, 1975, pp. 140-141; Medina, *op. cit.*, p. 8.
- 18) Gustavo Gutiérrez, *Dios o el oro en las Indias(siglo XVI)*, Salamanca : Ediciones Sígueme, 1989, p. 47.
- 19) Ibid., pp. 47-48.
- 20) Medina, *op. cit.*, pp. 137-196; 197-257. なお凡例として、以下の注で本書に言及、引用する際は *Doctrina cristiana* と表記し、葉（folio）番号を示す。
- 21) *Doctrina cristiana*, fol. 6.
- 22) 因みに1548年版『キリスト教の教え』における人間の「本性的平等性」は、神によるアダムとエバの創造を原因とする点で1544年版と同じ内容となる。それは「第5説教」でふれられ、「彼ら2人アダムとエバ、神の被造物は身体と魂で構成され、造られ、世界のすべての人間は構成され、造られた。（中略）すべてはわれわれの神が最初に造られた彼ら2人から生じる」（fol. 28v-29r）と記述される。Medina, *op. cit.*, p. 308. 但し、1498年のシスネロスの公教要理の第5の「信仰箇条」では、「本性的平等性」への言及はされず、「神がすべて目に見える事物と見えない事物の創造者であることを信じること」とのみ記される。J. Sánchez Herrero, *La enseñanza de la doctrina cristiana en algunas diocesis de León y Castilla durante los siglos XIV y XV*, en Archivos Leoneses Revista de estudios y documentación de los reinos Hispano-Occidentales II, León : Centro de Estudios e Investigación San Isidoro, 1976, p. 175.
- 23) *Doctrina cristiana*, fol. 5v-6r.
- 24) 赤木善光訳『アウグスティヌス著作集第4巻』、教文館、1979年、228頁。
- 25) 同上。
- 26) 同上。
- 27) *Doctrina cristiana*, fol. 14r-14v.
- 28) Ponce, *op. cit.*, p. 149, n. 141.
- 29) *Doctrina cristiana*, fol. 6r-6v.
- 30) Ibid., fol. 3r-3v.
- 31) アウグスティヌス、前掲書、205頁。
- 32) 同上、206頁。
- 33) *Doctrina cristiana*, fol. 6v-7r.
- 34) Ponce, *op. cit.*, p. 119.

- 35) トマスは同問題で「霊的実体と物質的実体から成る人間」について考察する。なお、本稿では『神学大全』の底本として、次の文献を用いた。R. Busa, S. I., curante, S. *Thomas Aquinatis Opera Ominia : ut sunt in indice thomistico additis 61 scriptis ex aevi auctoribus*, Stuttgart-Bad Cannstat : Frommann-Holzboog, 1990. また、『神学大全』の邦訳は創文社版のものを参照した。
- 36) トマスはその根拠として創世記 2:7 を挙げる。
- 37) Ponce, *op. cit.*, p. 122.
- 38) *Doctrina cristiana*, fol. 1v.
- 39) Medina, *op. cit.*, p. 120.
- 40) *Doctrina cristiana*, fol. 19v.
- 41) なお、シスネロスの公教要理と 1548 年版『キリスト教の教え』「第 20 説教」でも前述の引用文と同様の記述が見られるのみである。Herrero, *op. cit.*, p. 176; Medina, *op. cit.*, p. 235.
- 42) *Doctrina cristiana*, fol. 1v.
- 43) *Ibid.*, fol. 18r.
- 44) 第 7 部第 2 章。前掲、『アウグスティヌス著作集』（第 4 巻）、325 頁。
- 45) 第 1 巻第 26 章。加藤武訳『アウグスティヌス著作集』（第 6 巻）、教文館、1988 年、57-58 頁。
- 46) 第 1 巻第 29 章。同上、61 頁。
- 47) 第 2 部の 2 第 44 問題第 1 項第 3 異論解答。
- 48) 第 2 部の 2 第 25 問題第 1 項第 2 異論解答。
- 49) 第 2 部の 1 第 3 問題第 8 項参照。
- 50) 第 2 部の 2 第 23 問題第 1 項。
- 51) 同問題、第 2 項。
- 52) 同問題、第 5 項。
- 53) 第 2 部の 2 第 26 問題第 2 項。
- 54) 第 2 部の 2 第 44 問題第 3 項。
- 55) 第 2 部の 2 第 25 問題第 1 項。
- 56) 内 1 通はドミニコ会士達と連署のヒエロニムス会士達宛、2 通はドミニコ会士達とフランシスコ会士達連署による後述のスペインの摂政達と国王カルロス 1 世の重臣宛、残り 3 通はカルロス I 世宛、アントニオ・モンテシーノス宛、コルドバが単独で執筆したラス・カサス宛の手紙である。
- 57) 同島の先住民人口はスペイン人が初上陸した頃は約 100 万人であったが、1508 年には 6 万人、1554 年には 3 万人、1570 年の記録では 500 人足らずに激減した。R. メジャフェ著・清水透訳『ラテンアメリカと奴隷制』（岩波現代選書）、1979 年、26 頁参照。また他の原因として、スペイン人がもたらした疫病も挙げられる。なお、当時、同島のシバヨとサン・クリストバル地方には砂金の産地があった。
- 58) スペイン王室は既に 1503 年の王令によって好戦的で食人種と見なされた小アンティール諸島のカリブ族に対する奴隷化を承認していたが、この事情によって奴隷売買は無差別化されていった。
- 59) Medina, *Una comunidad al servicio del indio, La obra de Fr. Pedro de Córdoba O. P. (1482-1521)*, Madrid : Instituto Pontificio de Teología, 1983, p. 259. これは 10 名のドミニコ会士達と 12 名のフランシスコ会士達による、摂政シスネロスと大使ユトレヒトのアドリアン (Adriano de Utrech 1459-1523) 宛の手紙。エンコミエンダによって虐待され、死滅しているエスパニョーラ島の先住民への信仰教育と食事の改善を提案した内容となる。
- 60) *Ibid.*, pp. 259-261.

- 61) これは、スペイン国王の臣民としての先住民がスペイン人に征服された島々で死滅している状況を詳述する内容となる。
- 62) *Ibid.*, p. 264. この考えは、彼の『ラス・カサス宛書簡』にも見られる。コルドバはその中でラス・カサスを介して、ティエラ・フィルメかその沿岸の島々にスペイン人の迫害から逃れて来る先住民の救霊のための特別保護地域の設置を国王と重臣に提案する。*Ibid.*, p. 292.
- 63) アリストテレス『政治学』第1巻第5章に見られる、人間には奴隷に生まれついた者がいるという観念。
- 64) 例えば、彼は『インディアスの博物誌ならびに征服史 (*Historia Natural y general de las Indias*)』（1523-1535年）第5巻「序文」で、先住民の性質を「頭の働きも畜生並で、すぐに悪に染まる」と述べる。オビエード著・柴田秀藤、篠原愛人共訳『カリブ海植民者の眼差し』（アンソロジー新世界の挑戦4）、岩波書店、1994年、122頁参照。
- 65) 先住民を「自然奴隷」と見なすケベードの言動については、ラス・カサス『インディアス史』第3巻第148章参照。B. Las Casas, transcripción del texto autógrafa por M. A. Medina, fijación de las fuentes bibliográficas por J. A. Barreda, estudio preliminar y análisis crítico por I. P. Fernández, *Historia de las Indias, Obras Completas de Fray Bartolomé de Las Casas 3-5*, Madrid : Alianza Editorial, 1994, p. 2410. なお、ダリエンは現パナマ一帯の地域を指す。
- 66) 増田義郎『新世界のユートピア』、研究社、1971年、108-109頁。なお、「キリスト教国家」はイギリスの哲学者ソルズベリーのジョン（John of Salisbury c. 1115-1180）の概念に起因する。
- 67) Medina, *op. cit.*, p. 80.
- 68) *Ibid.*, p. 270. なおこれは、スペイン人征服者達の虐待により先住民が死滅させられる状況をカルロス1世の重臣ミセル・デ・セブレス、つまりギリェルモ・デ・クロイ（Micer Guillermo de Croy 1448-1521）宛に詳細に綴った、他のドミニコ会士達とフランシスコ会士達との共同執筆の手紙である。
- 69) その内容はラス・カサス前掲書、第3巻第4章参照。Las Casas, *op. cit.*, pp. 1761-1762.
- 70) Ponce, *op. cit.*, p. 149, n. 141.
- 71) 『神学大全』第1部第1問題第8項参照。また、恩恵と自然本性の関係に関するトマスの見解については次の学会誌掲載論文参照。青野和彦「ラス・カサス『布教論』の研究（3）—第5章第6-8節の宣教方法における信仰理解—」『キリスト教史学』、第62号、2008年、77-78頁。
- 72) その活動の詳細については次の文献を参照。Lino Gómez Canedo, *Evangelización y conquista, experiencia franciscana en Hispanoamérica*, México : Editorial Porrúa, S. A., 1977, pp. 148-149.
- 73) Las Casas, *op. cit.*, pp. 1768-1770.
- 74) Rivera, *op. cit.*, p. 141.
- 75) Medina, *Doctrina cristiana para instrucción de los indios*, pp. 125-126.